

令和 6 年度東大阪市地域研究助成金事業
研究成果の今後の活用について

研究テーマ	高齢者の地域包括ケアにまつわる文化的手法としての「音楽」のあり方にまつわる実践的研究
担当部署	地域包括ケア推進課

研究概要	<p>音楽における「想起」の力に着目し、東大阪市内在住の高齢者が、懐かしい音楽を共に鑑賞・演奏する機会を複数回プロデュースする。研究責任者は博士論文にて「音楽による想起がもたらすコミュニケーションデザイン」(https://www.ses.usp.ac.jp/nenpou/np21/np21_55-57.pdf) にまつわる研究実績を踏まえ、2022 年に近畿大学の教員に着任した際より、この大学が位置する東大阪市内での活動へと展開できないかと検討してきた。このような過程を踏まえ、地域の福祉サービスとして音楽を活用した新たなプログラムを発明することで、音楽における地域課題、福祉的課題に対する新たなアプローチの可能性を解き明かすこととする。</p>
研究成果	<p>本研究では、“ひとり”で思い出すのではなく、“誰かと共に”思い出すということによる、想起の幅やエンパワメントについて考えた。「音楽による記憶のシェア」がもたらすのは、ただ単に「懐かしい！」という感情だけでなく、相手の属性（立場や肩書き）を超えたつながりづくりを生み出すこと。さらには世代を超えた（本来は懐かしくないはずの）若者にまで影響を与えることがわかった。</p> <p>〈詳細〉</p> <p>①エリアでの「かわちのくにの思い出ラジオ」を3か所で実施。その中での包括職員が丁寧に声掛けし、アンケートを通じて参加者の声と向き合うというプロセスが極めてケアフルであり、これがあっての「本番」につながる。</p> <p>②文化的な地域・ケア実践を専門とする教員や学生は、その包括職員のケアを「別のやりかた」で引き継ぎながら、音楽と語りの場を演出。これが参加者にとって「絶妙な非日常」の機会となった。</p> <p>③過去の記憶と向き合う経験をひとりではなく共にすることで互いの人生経験を愛で合う。そこに学生がいることは、同世代での記憶の比較にとどまらず、良い意味で相対化する機会にもなりえる。</p> <p>④学生がしてあげるという関係ではない。学生自身が高齢者の語りによって「聴く力」が養われ、参加者である高齢者が学生をエンパワメントしている場でもある。</p> <p>⑤全体に対して語る時間とともに、参加者みなが必ず語り合える機会・時間を丁寧に確保することの重要である。それがあって、全体の一体感、愛で合う時間を醸成できる。</p>

今後の活用	<p>研究フィールド提供した地域包括支援センターの職員からは、普段の介護予防教室や家族介護教室、認知症カフェなどで活用できそうと意見があった。また、「トルクひがしおおさか」卒業生の協力をえることができ、今まで地域包括支援センターとの関係が薄かった前期高齢者との関わりができた。</p> <p>本研究の取り組みが、高齢者が日常生活圏域で活躍できる場の創出となっている。また、高齢者に関わる支援者としても実践的にネットワークづくりを学べる場となった。</p> <p>今後は、地域包括支援センターが音楽を通じたケアの方法を個別支援や介護予防教室に活かし地域で展開すること、担当課としてその後方支援を行うことで今回の研究を活用していきたい。</p>
-------	--